大島塾　新聞

ムロノキ
新聞社
第１８号

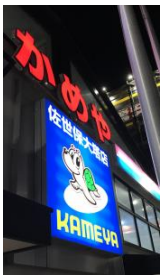
二〇二一秋の五島釣行記

令和三年十一月二十日（土）
大潮満月
潮午前九時、干潮午後三時

二年ぶり、やっとそろって五島に来ることができた宇田さん、向根、谷川、木村、それに筆者の五名。新型コロナがこのまま収束するとは思えないが、国内では新規発症がゼロに近づいている今、あたかも雲の切れ間から差した一筋の陽光、三日間の釣り旅行を心底楽しんだ。

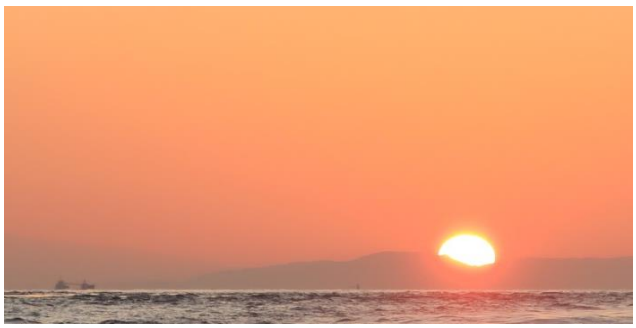
十一月十九日午後三時、木村運転のワゴン車に乗り込んだ向根、筆者の三人は秋晴れのもと長崎県佐世保、いつものばらもん渡船をめざした。この晴天は明日いっぱい、また最終日も雨は降らないという天気予報に心はウキウキ、車中の会話も終始はずんだ。夕方長崎道にはいったころ、カーラジオが「今夜は月蝕」と言うので東の空を振り返ると満月のはずの月が確かに欠けていた。それからひとしきり、小さくなってやがて満月に戻っていく月蝕を楽しんだ。

佐世保では「お栄さん」のちゃんぽんに今回は炒飯も頼んでみた。きくらげが沢山はいっていてこれまたたいそう美味であった。釣り具の「かめや」経由で、ばらもん事務所に着いたのは九時前だった。



この度の釣行にはさかな以外にもうひとつ任務があった。それは総務課のＳ嬢から下された「日の出の写真を撮ってきてください」というもの。病院広報誌正月号の表紙用だという。普段ばらもんの出船時間は八時前後で、すでに日の出過ぎ。翌朝は曇りの予報なので「これは不可能なミッションだ」と思われたが、なぜか今回はまだ夜も明けきれぬ六時過ぎの出発だった。この早出の理由はわからなかったが、とにかくこれで日の出の写真が撮れると喜び勇んで船に乗り込み、道中みんなで寄ってたかって五島灘に昇る朝日を撮りまくった。下の写真が何十枚もの中から厳選された最優秀作品である。

（広告）



五島灘の日の出、
それに群がるカメラマン

【千畳敷の三人】

向根、木村、筆者は千畳敷を選んだ。主な狙いは真鯛にグレ（脂ののった寒グレ）、木村はさらにアオリイカ、ヒラマサもと大いに意気込みを見せた。千畳敷につながる堤防に荷物を下ろしたとき気づいた。あちこちに動物の糞が散乱しているのである。四～五センチの大きさがある。二年前仲間が遭遇したイノシシが脳裏をよぎった。ちょうど島の漁師の方が作業していたので尋ねてみると、最近ヤギが増えてきたのだという。

猫、イノシシの次はヤギかぁ。直径五百ミリ足らずの小さい島にいろんな動物がいるものだと感心した。その時は、はやる気持ちがそれ以上の詮索をおしとどめたが、よくよく考えるとヤギの糞ってぽろぽろのウサギや鹿の糞と同じよね、とするとあの糞をしたのは？　ちょっとゾクっとした。

こちらのチームでは木村の健闘が光った。到着間もなくからエギングを始めて中小型ながら次々にアオリイカを釣り上げた。向根はテキサスリグで何匹かのアコウやアカハタを手にした。筆者は日中ずっとフカセで寒グレを狙ったが、当たってくるのは木っ葉サイズのグレばかり。タマヅメを過ぎてもこの状況は変わることなく、徐々に焦りが出てきた。

一方ふたりは早めにカゴ釣り（ウキ下八～十三㍍）を初めてぽつぽつと良型のグレを釣っていたので、筆者も並んで釣り始めると、やっと数尾のグレを手にすることができた。しかし、期待を胸に臨んだ秋の満月の夜、お目当ての大型真鯛が当たってくることはなかった。

翌日は曇り空ながら時折薄陽が差す穏やかな朝だった。波止先で少し遊んでみたがやはり大した釣果は得られず、帰り支度をしようと千畳敷に戻った。するとなにやら木村がルアーロッドを大きく曲げて格闘しているではないか。そういえば時々海鳥が海面に突っ込んでは小魚を漁っているのがみえる。大きなナブラは沸かなくても、この時期やはりこの海域には青物が回遊していたのだ。はたして木村の相手はヒラマサか？

磯際までは寄せてはきたが、なお激しく抵抗する相手をとても独りでは釣り上げれぬと思ったらしい。彼が言うには、タモ網をかついで現れた筆者に気づいた時「後光が差していた」とか。そうして掬い上げた獲物は七十六㌢、四・五㌔の良く太った（ほぼ）ブリだった。筆者「すくいの神」。

木村はその後さらに強い引きで三度仕掛けをとばされた。ヒラマサに違いあるまい。口惜しさの半面、この経験で次の機会に向けて学んだことは大きいという。まだ道は遠いかもしれないが、木村の視野は確かに八〇㌢のヒラマサを捉えた。

さて、あとの二人組はどうだったか？以下は谷川君による現地レポートである。

【福祉の波止】

宇田さんと小生（谷川）は、福祉の波止に上がった。小生今回の五島遠征に二つの目標を掲げていた。それは、「ヒラマサを釣る」「ハダカ瀬の裏のワンドを開拓する」であった。しかし、ハダカ瀬にはばらもんで一緒となった三人組となぜか定期連絡船で来ていた二人組がいて、ハダカ瀬の裏のワンド開拓について今回はあっさり断念した。そのため二年間かけて準備してきた「アジの表層泳がせ釣法」とルアーフィッシングでヒラマサに集中することとなった。

一方宇田さんは、本命カゴ釣り、アルバイトでメタルジグのプランであった。波止にあがり、お互い準備をしていよいよ釣り開始、といきたいところであったが、二人ともなかなか釣りが始まらない。二年間の放置で五島用の釣り具の調子が悪くなっていたのだ。PEの不調が原因で、後で泣きを見ることとなった。

やっとのことで釣りを開始したが、宇田さんはころころ変わる潮に難渋し、小生はアジが全く釣れず、仕方なくベラの泳がせとなってしまった。宇田さんは、途中全くスピードを緩めることもなく港に入ってきた定期連絡船に仕掛けを切られるというアクシデントにも関わらず、カゴ釣りで夕方までに四〇㌢前後のグレを二尾あげていた。一方小生は泳がせの棚を色々変えながらベラを流していたが、いつまでたっても元気なベラ君の姿をみるだけであった。合間に底物用のライトタックルで、木村さんに教えてもらった波止の先端にあるポイントをシンキングペンシルで攻めていたところ、一五時ごろ強烈な当たりとドラグの唸り声が響いた。竿にしがみつくのが精一杯で、あっという間にラインブレイクとなった。本命のリールが使えていたらもう少し勝負できたかもと悔やんだが、今まで経験のない引きの強さに五島のポテンシャルを感じられて嬉しくもあった（負け惜しみ）。

結局、夕まずめまで小生はベラ数匹だけであったが、満月の真鯛伝説を信じていたので、宇田さんに「本当に満月で真鯛が釣れるか分からんよ」と言われても余裕たっぷりであった。

夕マズメになり、潮が右側にいいスピードで流れるようになったため、小生もカゴ釣りを開始した。

以前同じような潮で、延々とカゴを流しハダカ瀬の先端付近で真鯛を釣ったことがあったので、今回も延々と流すこととした。ただこれをやると回収が大変で、付き合わされた宇田さんは「本当に回収に疲れる。でもそこで釣れるんだったら流さないと・・・」とブツブツ言いながら延々と流していた。けれどもこれが功を奏したのか、今回も延々と流したところで四〇㌢前後のグレが数尾釣れた。そして二〇時ごろ宇田さんが五〇㌢弱の真鯛を釣り上げた。

小生も宇田さんに場所を聞いてカゴを流したら同じ場所でウキが沈み、いいサイズの真鯛と思われる引きを味わいながら回収していたが、残念なことに途中針外れでばらしてしまった。

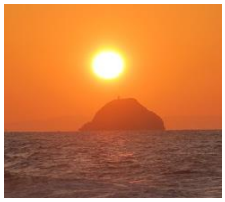
さて、これから満月の真鯛伝説再現だと意気込んで、全身の

疲労感も忘れて投げ続けたが、その後は三十五㌢程度のイサキが一枚釣れたぐらいであった。その後も大した釣果もなく零時前には、テントに入った。宇田さんは三時、小生は四時半起きで釣りを再開したが、期待の朝マズメも残念な結果に終わった。

（谷）

みんなが大満足！、といえる結果ではなかったが、冒頭にも書いたように雲の切れ間陽光の三日間は、また思い出に残るものとなった。今回活躍の木村だが、お手柄は釣果だけではない。往路の古賀インター付近で忍び寄る覆面パトカーを察知して減速、左の車線に入った。舌打するかのようにその車は我々のふたつ前に割り込んで来るや、間もなく赤い光を回して別の車を捕獲した。今回のMVPはこの厄難回避も併せて満票で木村に決定。本人によると「娘が選んでくれた派手な勝負パンツがラッキーアイテム」だったらしい。向根が写真を撮らせろと迫ったが拒否された。なにはともあれ、おめでとう！

さてミステリアスな動物の糞についてだが、帰宅後インターネットで調べてみたらヤギの糞の専門サイトがあって、確かにヤギの糞は通常ぽろぽろの兎糞型なのだが、水分の多い草を食べているときはそれが引っついて塊になるらしい。まさに先の写真と同じものがそのサイトに載っていた。一件落着！



【編集後記】

どうしても脂ののった寒グレを食べたい。筆者が刺身にしたのはよく肥えた四十七㌢の口太グレだった。五月に比べかなり旨かったものの、真の寒グレはこんなもんじゃなかったと思う。もう長いこと旨い口太を食べていないので、もしかすると思い出が記憶を美化しているのではと思わぬこともない。これはひとつ結論を出さないといけない。筆者は三月に行ってくるぞ、独りでもっ！あっ、それから令和四年春の例会は五月二十八日、または六月四日を考えています。またみんなでいけたらいいね。

（福）

gallery